

児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程¹⁾

——自己愛における評価過敏性、誇大性の関連の変化から

中山留美子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

本研究では、自己価値・自己評価を維持する機能の形成に関する、1) 自他未分化であった自己評価機能が自律的な機能の形成により次第に自他独立的なものへと変容する、2) 自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能は独立な関係を保ちながら発達する、という2つの発達モデルについて、自己愛における評価過敏性と誇大性の2側面の関連の変化から検討を行った。小学6年生から大学生までのデータを用いて2種類の自己評価機能(誇大性、評価過敏性)の関連の年齢差について検討したところ、一部反する結果を含むものの、それらの関連は全体として学年が低いほど高く、次第に関連が弱まることが示された。この結果は、自己評価を維持する機能の形成が、やや分化した状態から個人差を発現・強化させていくという過程をたどることを示唆しており、これは1)のモデルを示唆する発達モデルであると考えられた。最後に、自己価値や自己評価を維持する機能の個人差および発達に関する詳細な検討の必要性が議論された。

キーワード：青年期、児童期後期、自己愛、自己価値・自己評価を維持する機能、相関関係の発達の差異

問題と目的

本研究では、自己価値・自己評価を維持する機能の形成を、Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) や Gabbard (1989, 1994 館監訳 1997)、梶田 (1980) などに想定される発達モデルにもとづいて

検討する。

自己価値や自己評価を高く保つことが、青年の適応や行動に重要な役割を果たしていることが実証的に示されてきているが (Taylor & Brown, 1988; Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, Simon, & Pinel, 1992 など)、それを可能にする機能がどのように形成されるのかという問題について実証的に検討した研究は見当たらない。

自己価値や自己評価を維持する機能の発達について、2つの理論的考察がある。1つは Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) らのもので、はじめ自他未分化であった自己評価のプロセスが自律的な自己評価機能の形成により、次第に自他独立的なプロセスへと変容するという過程を想定できる。

Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) は変容性内在化 (transmuting internalization) の過程として、

1) 本研究にご協力くださいました皆さん、協力校の校長先生、教頭先生、また項目内容等の検討にご尽力くださいました先生方に深く感謝いたします。本稿の構想にあたり、名古屋大学大学院教育発達科学研究科 氏家達夫教授には重要なご助言、ご指導を賜りました。また、本論文の作成にあたり、査読の先生方からたくさんの貴重なご指摘、ご助言をいただきました。先生方に心より御礼申し上げます。本論文の一部は第19回 International Society for the Study of Behavioural Development (ISSBD) にて発表されました。

自己評価を維持する自己の構造の形成・発達を理論化している。Kohut は、(子どもの) 自己評価を調整する機能を担う他者を自己愛的対象(自己対象)と呼び、適切な賞賛や応答などによる自己対象の機能の結果、自己評価が調整され、自己愛平衡の状態(自己評価が安定している状態)が維持されるとしている。変容性内在化とは、その自己対象の機能が“内在化²⁾”され、最終的には自己評価を調整する内的な構造(自己評価を維持する心的構造)として機能するにいたる過程である(Elson, 1987 伊藤監訳 1989)。これによれば、自他ははじめ未分化なものであり、自己評価の安定は養育者のケアに委ねられている。しかし、養育者のケア³⁾は常に子どもの要求に応えるものではないため、子どもは適量の欲求不満³⁾を感じると同時に、養育者に依存していた自己評価の調整を自ら行おうとすることによって⁴⁾内的な構造を形成していくのである(Kohut, 1971 水野・笠原監訳 1994, p. 38)。

Harter (1999) や Higgins (1991) も同様のプロセスを想定していると考えられる。Harter (1999) は、児童期中期から、I-self (主体としての自己) が内在化された意見と基準をもって直接的に Me-self

(客体としての自己) を評価することが可能になると述べている。また、Higgins (1991) は、心的表象能力など知的発達 (Epstein, 1991) との関連から、自己システムの発達について述べている。それによれば、幼い子どもは自分の基準や意見を重要な他者のそれと同一視しているが、それらが次第に内在化されるという。

以上の理論的指摘からは、未熟な自己評価構造において他者評価とはすなわち自己評価であり、自他の区別はほとんどなされていないと考えられる。よって、子どもにとって重要な他者から肯定的に評価されることは、自己評価にとって強いインパクトを持つと考えられる。しかし他者評価の機能が内在化され、それが自己の構造(自律的な自己評価機能)となっていくことで、自他の自己評価が区別して捉えられるようになる。

2つ目は Gabbard (1989, 1994 館監訳 1997) や梶田 (1980) のもので、これらからは、他者評価に依存した自己評価と自己注目的になされる自己評価のプロセスが、独立した関係を保ちながら発達していくという過程が予測される。

中山・中谷 (2006) は、Gabbard (1989, 1994 館監訳 1997) の指摘にもとづき、自己愛を自己価値・自己評価の維持機能として概念化している⁵⁾。Gabbard (1989, 1994 館監訳 1997) によれば、自己愛はその特徴により2種類に分類され(誇大型、過敏型)、それらの特徴は自己評価を維持しようと闘っている(ことを反映している)という点で共通する。中山・中谷 (2006) は自己愛における2種類の自己評価維持様式を誇大性、評価過敏性(それぞれ Gabbard の誇大型、過敏型に対応)とし、誇大性は自らを肯定的に認識することで自己価値・自己評価を肯定的に維持しようとする、評価過敏性は他者によって自己価値・自己評価を低められるような証拠がないことを確認すること

2) Hartmann (1939) は内在化を「自律的自己制御が環境による制御に取って代わるプロセス」と定義している。

3) ここでの“ケア”は、Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) の用語でいう“映し返し”，すなわち、自己対象が担っている、子どもの自己評価を調整するための承認、応答、確認、指導などの具体的な行為(Elson, 1987 伊藤監訳 1989) であると考えられる。また、ここから、適度の欲求不満とは、自己対象が子どもに対してうまく承認、応答などの反応を返せないことにより生じるフラストレーションのことであると考えられる。

4) 水野・笠原監訳 (1994, p. 38) の原文では、「養育者に向けていたリビドーを自己に充当することで」とされているが、リビドー概念は精神分析学における難解な概念であるため、ここでは「リビドーを自己に充当すること(リビドー備給)」と「自己評価の調整」を同義に用いている Morf & Rhodewalt (1993) にならい、平易な表現に改めた。

5) 自己愛は「自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能である」として機能的に定義される (Stolorow, 1975)。

によって自己価値、自己評価を肯定的なものとして維持しようとしていることを反映している。Gabbard (1989) はこれらの特徴が直交成分（無相関）であることを指摘しており、これは自己価値・自己評価を維持する心的機能の個人差が、自己注目的な自己評価機能（誇大性）、他者依存的な自己評価機能（評価過敏性）という2種類の機能の組み合わせ（個々人がそれらの機能をどれくらいの割合ずつもっているか）により特定されることを示唆している。

中山・中谷 (2006) はこれら2種類の自己愛（誇大性、評価過敏性）の発達的变化について検討しているが、Gabbard (1989, 1994 館監訳 1997) に基づき、対象とした全ての年齢に両者の直交性を仮定している。また、梶田 (1980) は高校生と大学生を対象に、自己評価に関する意識を広く扱った実証的な研究（自己愛に関連する意識を含む、自己評価的なニュアンスを持つ項目群の相関分析）を行い、Gabbard (1989) が指摘するものと同様の2種類の自己評価機能（他者評価との関係で捉えられる自己評価、自分自身を注視し理想自己との照応から生じる自己評価）を見出している。そして、それらが相互相関的な関係にはなく、独立性を保ちながら発達していくと述べている。

Kohut の発達モデルは、Gabbard の指摘するような自己評価機能に対応付けて考えることが可能である。すなわち、Kohut の理論的立場によれば、年齢進行とともに、変容性内在化をとおして自己を肯定的に評価する機能が内在化され、自己注目的な自己評価機能が強固なものになる。そのため、他者により自己評価を調整してもらう必要がなくなるため、2種類の自己評価は必ずしも連動しなくなる。言い換えれば、未熟な自己評価構造では自己評価における自己注目的な領域と他者依存的な領域が相互相関的な関係にあり、他者依存的な自己評価意識が高まると同時に自己注目的な自己評価意識が活性化されるが、自己評価構造が成熟するにしたがって、他者機能を内在化する形で自

己注目的な自己評価機能が強まっていく。よって、発達とともに他者依存的な自己評価機能と自己注目的な自己評価機能の活性化の度合いが相関しなくなると考えられる。一方、Gabbard (1989) や梶田 (1980) の指摘によれば、自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能の関連の仕方には個人差があり、この個人差は年齢にかかわらず存在すると予想される。これに基づけば、2種類の自己評価機能は年齢にかかわらず独立（無相関）であることが予想される。

本研究では、これら2つの発達モデルについて吟味し、自己価値・評価を維持する機能の形成に関する発達モデルを検証するため、児童期後期から青年期後期にいる人々を対象にする。

自己評価・自己価値を維持する機能の形成にとって重要な時期は、児童期と思春期の間に始まり後期青年期に最終的な段階を迎えたと考えられる。これは、本論文で取り上げる自己評価・自己価値を維持する機能と同義だと考えられる“心的装置”を安定させ強化する⁶⁾段階が、児童期と思春期の間に始まり、後期青年期に最終的な段階を迎えたとする Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) の指摘による⁷⁾。同様の予想が Higgins (1991) から可能である。Higgins (1991) は、児童期中期までは自己評価の基準が重要な他者のそれと同一視されているが、児童期中期になると、自己評価の基準は重要な他者の基準から相対的に独立しは

6) Wolf (1988 安村・角田訳 2001) によれば、指摘される時期（青年期後期）は、思春期に始まった過程がより全体的（な認知過程）に深まって進んでいく時期であるとされる (p.76)。よって、安定させ強化するというこの意味は、形成された自己機能が幅広い認知過程について働くようになることであると考えられる。

7) Kohut の理論では、自己評価を維持する心的構造が構成される初期段階は、潜伏期初期（児童期初期）とされるが、特に潜伏期と思春期の間（児童期後期）から青年期にかけての時期が、その構造を安定させる（⇒脚注5）、「最終的で重要な段階」として重視される（Kohut, 1971 水野・笠原監訳 1994, p41）。

Table 1 調査協力者の内訳

	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大学	合計
男子	97	91	108	115	78	59	61	106	715
女子	78	91	105	127	75	85	86	105	752
合計	175	182	213	242	153	144	147	211	1467

じめ、内在化されるとしている。

また、自尊感情を扱った一連の実証研究で、青年期初期において自尊感情が一時的に低下し、その後自尊感情が次第に高くなっていくという発達の経過があることがわかっている。Rosenberg (1986) や榎本 (1998) によれば、自尊感情は11歳の頃に低下し、12~13歳の頃にもっとも低くなる。青年期初期において自己否定感情(自己嫌悪感)が高まるという指摘もある(榎本, 1998; Harter, 1999)。これらの結果は、青年期初期(児童期後期から青年期にかけて)自尊感情を生み出す自己の構造が、質的に変化することを示唆している。このような自己の構造の質的变化は自己評価・自己価値を維持する機能の発達と密接に関連していると考えられる。

以上のことから本研究では、自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程について、特にその形成に重要な時期であるとされる児童期後期から青年期後期を扱い、自己注目的な自己評価機能(誇大性)および他者依存的な自己評価機能(評価過敏性)の関連の年齢差について検討する。

方 法

調査協力者

小学6年生から大学生計1447名の協力を得た。協力者の内訳はTable 1のとおりである⁸⁾。調査はすべて、東海地方にある学校において、授業中あるいはホームルーム時に教室で実施された。小学校(2校)、中学校(1校)、高校(2校)は全て

公立の学校であり、高校は進学希望者の多い普通科高校であった。また、大学(3校)の内訳は公立校1校、私立校2校であった。なお、調査対象者への倫理的配慮として、各小・中・高校の教員に質問内容のチェックを受けるとともに、実施時に回答が任意であることを説明した。

調査時期

データの収集時期は、2003年11月(中2から大学生)、2005年7、9月(小6と中1)であっ

9) 項目表記の修正はある種の問題をはらむが、本研究では元尺度の表記のままでは子どもたちが理解できないとの指摘を受け、意味内容が同一になるように表記を変更した。元尺度項目との同一性は、国語を専門とする教諭らによる確認のほか、母集団同時分析による測定不変モデル(それぞれの因子負荷が母集団間で等しいことを仮定したモデル)の評価により検証された。修正内容は、以下のとおりである(項目番号および変更前の項目内容はTable 2参照)。項目2「ほかの人がわたしの言うことやすることを、ちゃんと聞いたりみたりしてくれないと、自分が価値のない人間であるような気がする」項目4「友だちにばかにされて、あとですごくはらがたつことがある」、項目10「人から『間違っているよ』と言われると、ゆううつな気分が続く」、項目13「人から『間違っているよ』と言われると、自分の全てがだめだと言われたように感じる」、項目16「自分の欠点や失敗を少しでも悪くされると、気持ちが悪く不安定になる」、項目1「自分は、ほかの友だちから見たらみりょくのようだ」、項目6「わたしは今まで、ほかの友達にはできないようなことをたくさんしてきた」、項目9「まわりの人は、わたしをもっと高く評価してもよいとおもう」、項目14「自分では、ものごとをてきぱきすすめられるし、うまく判断できるようなかしこさも持っていると思う」、項目18「自分の考え方や、こころのゆたかさにはかなりじしんがある」。なお、調査の実施時に、「人」が友だちや先生などの身近な他者であることを教示した。

8) なお、中2から大学生のデータは、中山・中谷(2006)における研究2のデータと同一である。

Table 2 評価過敏性-誇大性自己愛尺度の確認的因子分析(結果)

	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大	
評価過敏性	2. 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする	.71	.64	.70	.54	.55	.52	.56	.53
	3. 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	.68	.66	.71	.56	.61	.60	.61	.64
	4. 人に軽く扱われて、あとですごく腹が立つことがある	.51	.49	.60	.45	.48	.47	.43	.47
	7. 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	.67	.64	.64	.53	.57	.53	.52	.56
	10. 他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	.75	.78	.73	.64	.66	.65	.61	.60
	13. 他人から間違いや欠点を指摘されると、憂うつな気分が続く	.81	.76	.82	.68	.67	.62	.65	.66
	16. 自分の欠点や失敗を少しでも悪くいわれると、ひどく動揺する	.75	.73	.78	.70	.70	.71	.72	.69
17. 常に優れた人や目上の人に認めてもらえなければ自信が持てない	.53	.48	.51	.41	.47	.44	.43	.43	
誇大性	1. 自分にはどこか、他の人をひきつけるところがあるようだ	.60	.73	.64	.62	.70	.67	.63	.61
	5. 私の意見どおりにすれば、もっとものごとがうまく進むのに、と思う	.48	.58	.46	.41	.45	.51	.53	.45
	6. 私は今まで他の人にはできないような経験をつんできた	.51	.60	.49	.45	.49	.48	.48	.47
	8. 私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である	.68	.81	.64	.59	.58	.68	.64	.62
	9. 私は、周りの人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	.61	.78	.60	.65	.63	.64	.65	.60
	11. 私には持って生まれたすばらしい才能がある	.71	.67	.68	.65	.71	.76	.74	.71
	12. 自分の体を人に自慢したい	.42	.42	.46	.46	.42	.44	.45	.40
	14. 自分自身では、要領もいしいし、うまく判断のできるような賢さも備えていると思う	.56	.73	.57	.54	.55	.56	.58	.53
15. 自分はきっと将来成功するのではないかと思う	.52	.56	.54	.56	.58	.61	.60	.45	
18. 自分の考えや感情の豊かさ、感受性にはかなり自信がある	.50	.60	.50	.50	.49	.56	.58	.53	
F1-F2 因子間相関	.44	.32	.28	.10	-.15	.21	-.03	-.03	

注. 数値は測定不変モデルでの各因子へのパス係数。

た。

質問紙

「評価過敏性-誇大性自己愛尺度」(中山・中谷, 2006), 全 18 項目を用いた(質問項目数は「誇大性」10 項目, 「評価過敏性」8 項目; Table 2 参照)。評定法は「全く(全然)あてはまらない」から「よくあてはまる」の 5 件法であった。

なお, 本尺度はそもそも大学生を対象に作成されたものであるため, 小学 6 年生, 中学生については, 表現が難解であると思われた表現を, 子どもの理解が同一になるよう留意しながら, 担任教諭らの協力を得て児童生徒にもわかりやすいものに修正した⁹⁾。

結果

1. 評価過敏性-誇大性自己愛尺度の因子分析

まず, 全ての年齢段階で尺度の 2 次元性が保持されるのかどうかを確認するため, 誇大性-評価

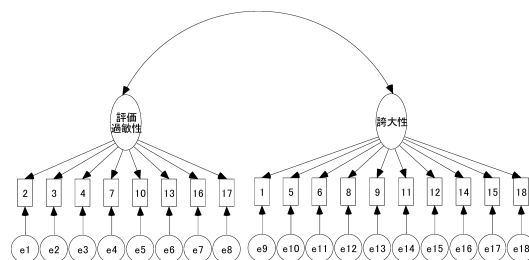


Figure 1 誇大性-評価過敏性自己愛尺度の確認的因子分析(検討モデル) [□内の数値は項目番号。項目内容は Table 4 参照]

Table 3 各尺度の平均値および標準偏差

	小6 _a	中1 _b	中2 _c	中3 _d	高1 _e	高2 _f	高3 _g	大 _h
評価過敏性								
全体	2.32 (.103)	2.31 (.93)	2.64 (.78)	2.81 (.69)	2.82 (.73)	2.92 (.71)	2.88 (.72)	2.77 (.71)
女子	2.46 (1.05)	2.32 (.91)	2.61 (.83)	2.92 (.71)	2.92 (.71)	2.97 (.73)	2.89 (.65)	2.97 (.65)
男子	2.21 (1.00)	2.31 (.95)	2.67 (.73)	2.70 (.66)	2.73 (.74)	2.83 (.69)	2.87 (.81)	2.58 (.71)
誇大性								
全体	2.14 (.77)	2.11 (.77)	2.30 (.61)	2.38 (.61)	2.55 (.62)	2.61 (.68)	2.73 (.72)	2.59 (.61)
女子	2.08 (.75)	2.00 (.73)	2.15 (.62)	2.35 (.53)	2.50 (.61)	2.42 (.60)	2.54 (.60)	2.56 (.55)
男子	2.18 (.79)	2.23 (.80)	2.45 (.57)	2.40 (.69)	2.59 (.63)	2.89 (.71)	2.98 (.80)	2.62 (.67)

()内は標準偏差

注. 多重比較の結果は, 評価過敏性で全体: a,b<c-f,c<f, 女子: a,b<d-h; c<f,h, 男子: a<b-h, b<c-g, 誇大性で全体: a,b<d-h; c<e-h; d<f-h, 女子: a<e-h; b<d-h; c<e,g,h, 男子: a,b<e-h; c,d<f, g; e<g; g<hである。なお, アルファベットは Table 3, 学年横の下つきの文字と対応している。

過敏性自己愛尺度に対し, 全てのデータを用いた多母集団同時分析による確認的因子分析を行った。2種類の自己機能がはじめ未分化で強い関連をもっているという仮説から, 低い年齢段階においては「誇大性」と「評価過敏性」が相互相関を持つ可能性がある。このことから, 想定する2つの潜在変数の間に相関があることを仮定した (Figure 1)。また, この仮説からは, 低い年齢段階においては2次元モデルが適合しない可能性も示唆される。その場合, 学年を通した因子構造の一貫性 (因子不変性) が否定され, モデルの適合度が低くなることが予想される。

分析の結果を Table 2 に示す。仮説モデルの適合度は等値条件を設けないモデル (配置不変) において $GFI=.95$, $AGFI=.88$, $CFI=.99$, $RMSEA=.012$, $AIC=2323.38$, 因子負荷が等しいという等値条件を設けたモデル (測定不変) において $GFI=.94$, $AGFI=.87$, $CFI=.98$, $RMSEA=.014$, $AIC=2287.93$ で

10) 適合度指標に関し, Schermelleh-Engel, Moosbrugger, & Müller (2003)は, $.95 \leq GFI \leq 1.00$, $.90 \leq AGFI \leq 1.00$, $.97 \leq CFI \leq 1.00$, $0 \leq RMSEA \leq .05$ を適合が良い (Good Fit), $.90 \leq GFI \leq .95$, $.85 \leq AGFI \leq .90$, $.95 \leq CFI \leq .97$, $.05 < RMSEA \leq .08$ を許容できる適合 (Acceptable Fit) と説明している。

Table 4 各学年における「誇大性」「評価過敏性」の相関

	全体	男子	女子
小6	.36***	.29***	.46***
中1	.32***	.24*	.42***
中2	.32***	.35***	.30**
中3	.14*	.08	.23**
高1	-.07	-.02	-.10
高2	.19*	.23	.25*
高3	.03	-.08	.17
大	.06	.03	.14

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

あり, 因子負荷に制約を設けたモデルでも, 各指標とも十分または容認できる値¹⁰⁾であった。想定した「評価過敏性」「誇大性」2因子に対する各下位尺度項目のパス係数は十分に高かった。

次に, それぞれの因子に高く負荷する項目群で下位尺度を構成した (誇大性; 小6から学年順に $\alpha=.83, .88, .83, .80, .81, .85, .85, .80$, 過敏性; 同様に $\alpha=.88, .86, .88, .77, .80, .79, .78, .80$)。なお, 各下位尺度で学年ごと・男女別に算出した1項目あたりの平均値と標準偏差は Table 3 に示すとおりである。

2. 各段階における相関係数の算出および相関差の検定

学年ごとの相関係数を算出し、回帰分析による検討を行った。

2-1 全体のデータに関する分析 まず、男女ともに含んだ全体のデータから相関係数を算出した (Table 4)。「誇大性」と「評価過敏性」の相関係数は、学年が高いほど無相関に近くなる傾向にあり、これら2側面は全体的にみて、発達とともに独立した関係へと変化していくものであることが示唆された。そこで、学年を基準変数、個々の相関係数を目的変数とする単回帰分析を行ったところ、偏回帰係数は $\beta = -.77$ ($p < .05$ で有意) であった。しかし、個々の数値を見ると、小6から高1までの相関係数が一貫して減少し、高1ではほぼ無相関になっているにもかかわらず、高2では弱い相関が示されていた。高3、大学生における相関係数は高1と同様にほぼ無相関であった。

2-2 男女別での検討 次に、男女別での検討を行った (Table 4)。相関係数は全体のデータから算出されたものと同様、男女ともにある時点（男子では中3、女子では高1）から無相関に近くなる傾向を示していた。男女別で算出した相関係数についても学年を基準変数とする単回帰分析を行ったところ、男子で $\beta = -.72$ ($p < .05$)、女子で $\beta = -.66$ ($p < .10$) であった。しかし、全体の傾向と同様、高校2年生においては、男女ともに弱い正の値が示された。

また、男女の値を比較してみると、女子では男子よりも一貫して高い値が示されていた。そこで、性別も学年と共に基準変数に組み込んで重回帰分析を行ったところ、偏回帰係数は学年で $\beta = -.66$ ($p < .01$)、性別（男子を1、女子を2として投入）で $\beta = .29$ ($n.s.$) であり、性別の効果は統計的に有意とならなかった。なお、学年と性別の交互作用は認められなかった ($\beta = .01$, $n.s.$)。

考 察

まず、因子分析の結果は、因子不変性、すなわち年齢を超えて一貫した2因子構造を基本的に認めるものであった。このことは、自己と他者が基本的には別個のものとして捉えられているということを示している。このことを考慮したうえで、結果の考察を行った。

相関に関する分析結果は、学年（年齢）が低いほど自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能が強く関連していること、つまり、低い年齢段階において自己評価の2側面は完全な独立の関係でないことを示していた。これは、自己に関して肯定的な評価をするほど（しよう意識しているほど）、他者による評価の影響を受けやすいこと、あるいは他者評価の影響を受けやすいほど自己に関して肯定的な評価をすることを示唆している。

また、2つの自己評価機能の関連は年齢とともに弱くなり、中学3年生以降のデータにおいては全体として無相関に近い値が示された。この結果は、自己価値・自己評価を維持する機能が発達とともに分化の程度を強め、主に用いる自己評価機能に関する個人差が次第に拡大していくことを示唆している。

これに関し、中山・中谷 (2006) では、自己注目的な自己評価機能（誇大性）と他者依存的な自己評価機能（評価過敏性）が、年齢増加とともに、量的な増加傾向を示すことが報告されている。これを考慮すると、低い年齢段階においてはほとんど示されなかった個人差が年齢とともに強調され、中学3年生頃にはより明確な形で現れてくるという過程を考えることができる。

これは Kohut のモデルを概ね支持する発達過程を示す結果といえるだろう。すなわち、自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能は初め分化が不完全で強い関連をもっているが、発達とともにその関連は弱くなる。そしてその結果、

それぞれの自己評価機能の強度により特定される個人差が発現してくる。

男女差を検討した結果、全体として女子の相関係数が高いことが示された。回帰分析の結果ではデータ数などの影響で統計的に有意とならなかったが¹¹⁾、ある程度の数値が示されていた。これは、女子のほうが男子よりも、自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能が分化していない傾向にあることを示唆している。例えば Eagly (1987) によると、自己価値の感覚は、男性においては自律性や個人的な達成と密接な関連をもっているが、女性においては親密性と他者への感受性が重視される。また、女性と男性では異なった志向性を適用する傾向があり、女性が親密性を重視し分離を恐れる一方で、男性は深い関係や親密性を恐れており、親密な関係を形成しにくいとされる。また、Harter (1999) は、Eagly (1987) らの説を参照しながら、自己の自律性（自主性）と親密性（連結性）の差異を、男女の自己システムの違いに当てはめられるものとして紹介している。このようなことをふまえると、本研究で見られた男女差は、自己の成熟度の違いというよりは、男女の自己評価構造における根本的な相違と捉えるべきものと考えられる。

また、男女あわせたデータ、男女別のデータはともに全体的な分化傾向を示していたものの、高校2年生においては男子・女子・全体ともに弱い正の相関が示され、その傾向に反する結果となっていた。このような結果が得られた原因はわからないが、一つの可能性として、自己注目的な自己評価機能と他者依存的な自己評価機能の分化が、発達以外の要因（例えば状況や環境）によって影響されることが考えられる。例えば、本研究の調

査対象となった高校は、毎年多くの生徒が大学や専門学校に進学する高校である。高1の時期には試験に合格し入学できたということで青年の自己は安定しているが、高2になると学校の指導により、または自主的にも、進学について考え始めるようになると考えられる。特に調査が行われた時期（11月）は、上級生である3年生が進路決定の大詰めを迎えている頃である。この時期において、進路選択にかかわるより具体的な自己評価を迫られ、青年の自己評価構造は一旦揺らぎ、再び他者依存的な状態へと退行するのかもしれない。

今後の課題

結果の解釈に関して留意すべき点および今後の課題として、以下のような点が挙げられる。

考察においても述べたが、まず、本研究での結果の解釈は、「やや分化した状態からより分化した状態へ」の移行という範囲で捉えられるべきである。因子分析の結果は、一貫して2因子構造であることを基本的に認めるものであった。このことは、自己と他者が基本的には別個のものとして捉えられているということを示している。低い年齢においては2因子間に中程度の相関が認められたものの、全く未分化な状態では、完全な1因子構造をとると考えられる。

対象とした年齢範囲についても考慮せねばならない。本研究では児童期後期からの変化を検討するため、6年生からのデータを扱った。最も低い年齢として6年生を扱ったのは、彼らの年齢がちょうど児童期の終わりにあたる年代であると考えられたためであるが、この判断は自己という抽象的なものを問うという質問紙の性質から、より低い学年の児童が回答することが難しいという制約の上で試されたものであった。しかし実際には、児童期後期として4、5年生の児童も対象とすべきであった。大学生以降においてさらなる変化が起こる可能性も否定できない。Kohut らに基づく

11) そのため、本研究での男女差に関する知見の再現可能性には疑いもたれると考えられる。しかし、本研究では男女差が明らかに見られており、偏相関係数も考察に価する十分なものであるため、考察が必要であると考えた。

1つ目のモデルでは、2種類の自己評価機能は最終的に負の関連を持つようになることが予想される。今後、可能なアプローチによる、より広い年齢範囲を対象とした研究が必要である。

また、高校2年生の結果からは、自己評価維持機能の分化が、発達の要因のほかに、状況や環境によって影響される可能性が示唆された。状況や環境の要因が影響を及ぼすとすれば、本研究で高校2年生に対し調査を実施した時期は妥当でなかった可能性もある。調査時期や個々の調査対象のおかれている状況を考慮し、再度検討を行う必要があるだろう。

さらに、本研究では相関関係のみについての検討しかおこなっておらず、影響の方向性については確認されていない。自己注目的な自己評価機能が他者依存的な評価機能に影響を与えるという逆の方向性も十分に考えられるため、方向性について結論付けるためにはさらなる研究が必要であると考えられる。

本研究で得られた結果が他の文化圏においても得られるかどうかについても確認する必要がある。なぜなら、日本人（アジア人）の自己観は相互依存的で、人からの評価に敏感であるという議論があり（Markus & Kitayama, 1991; 北山, 1995; 金, 2005）、欧米人の自己とは発達の様相や目指す方向性が異なる可能性があるためである。

しかしながら、それらを考慮したうえで、本研究から得られた知見は有意義なものであったといえよう。本研究の結果からは、自己価値・自己評価の機能が、やや分化した状態から徐々に分化を強め、個人差を明確化させていくという発達のプロセスが示唆された。今後、このような発達過程に関する詳細な確認を行うとともに、自己価値・自己評価を維持する機能の個人差およびその形成について、さらに踏み込んだ研究が望まれる。また、本研究から、今後、自己愛理論に関する実証的な研究をさらに進めていくことが有意義であることが示唆される。自己愛理論はそもそも人格

病理の研究から導かれたものであるが、本研究で扱った Kohut の理論のように、健康な人格における自己（評価）に関する記述も多くなされている。自己愛理論から示唆を得ることで、自己評価の発達およびその障害に関する知見をさらに深めることができるだろう。

引用文献

- Eagly, A. (1987). *Sex differences in social behavior: A social role interpretation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Elson, M. (1987). *The Kohut Seminars on self psychology and psychotherapy with adolescents and young adults*. W W Norton & Co Inc.
(エルソン (編) 伊藤 洸監訳 (1989). コフト自己心理学セミナー I 金剛出版)
- 榎本博明 (1998). 「自己」の心理学——自分探しへの誘い——サイエンス社
- Epstein, S. (1991). Cognitive-experiential self theory: Implications for developmental psychology. In M. R. Gunnar, & L. A. Sroufe (Eds.), *Self processes and development: The Minnesota Symposia on child development*. Vol. 23. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 111–137.
- Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of Menninger Clinic*, **53**, 527–532
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.
(ギャバード, G. O. 館 哲郎 (監訳) (1997). 精神力動的臨床心理学——その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床篇 II 軸障害 岩崎学術出版社)
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, D., & Pinel, E. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 913–922.
- Harter, S. (1999). *The construction of the self: A developmental perspective (Distinguished contributions in psychology)*. New York: Guilford Press.
- Hartmann, H. (1939). *Ego psychology and the problem adaptation*. New York: International Universities Press, 1958.
- Higgins, E. T. (1991). Development of the self-regulatory and self-evaluative processes: Cost, benefits, and trade-

- offs. In M. R. Gunner, & L. A. Sroufe (Eds.), *Self processes and development: The Minnesota Symposia on child development.*, Vol. 23. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 125–166.
- 梶田叡一 (1980). 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 金 美伶 (2005). 韓国と日本の大学生における対人不安と同一性, 公的自己意識, 相互依存的自己との関係 *パーソナリティ研究*, **14**, 42–53.
- 北山 忍 (1995). 文化的自己観と心理的プロセス *社会心理学研究*, **10**, 153–167.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.
- (コフォート, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224–253.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance: Explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 668–676.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 *教育心理学研究*, **54**, 188–198.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.) *Psychological perspectives on the self*. Vol. 3. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 107–136.
- Schermelleh-Engel, K., Moosbrugger, H., & Müller, H. (2003). Evaluating the fit of structural equation models: Test of significance and descriptive goodness-of-fit measures. *Methods of Psychological Research—Online*, **8**(2), 23–74.
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179–185.
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Positive illusions and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193–210, 211–222.
- Wolf, E. (1988). *Treating the self: elements of clinical self psychology*. New York: The Guilford Press.
- (ウルフ, E. 安村直己・角田 豊訳 (2001). 自己心理学入門——コフォート理論の実践—— 金剛出版)
- 2005.12.16 受稿, 2006.8.27 受理—

The Formation of Self-worth Maintenance System in Late Childhood and Adolescence

Rumiko NAKAYAMA

Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007 Vol. 15 No. 2, 195–204

According to Harter (1999), self-system develops from heteronomous to autonomous, but Kajita suggested earlier (1980) that self-oriented self-evaluative process and other-oriented process develop as independent and orthogonal factors. To examine these models, this study investigated developmental changes in the correlation between grandiosity and hyper-sensitivity, which were self-oriented and other-oriented processes, respectively, from the viewpoint that conceptualizes narcissism as self-worth maintenance system. Results showed that the correlation coefficient for each grade, from the 6th grade to undergraduates with a total of 1447 respondents, weakened progressively, and the correlation disappeared after the 9th grade. The result was consistent with the first of the two models; grandiosity and hyper-sensitivity gradually differentiated as the person matured. In conclusion, necessity of in-depth consideration of individual variation in self-worth maintenance system and its development was discussed.

Key words: late childhood, adolescence, narcissism, self-worth maintenance system, developmental change